

---

# テレビ

muffin

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テレビ

### 【ΖΖΠード】

N8161C

### 【作者名】

muffin

### 【あらすじ】

月曜の朝はテレビの話題で盛り上がる。土曜の夜のあの番組。そこに加われない。

「ねーつ見たー？」

「見たー」

「見た！」

「笑えたー」

教室に入った瞬間から、ほとんど叫び声だ。

「コマネチーー！」

お調子者の男子がお笑いタレントのギャグを真似るのを見て、周囲の小学生たちは一斉に笑った。教室に明るい笑顔が満ち溢れた。

小学校の月曜の朝は、熱狂的に盛り上がる。土曜の人気のお笑い番組の話をしたくてしたくて、皆我先にと口を開く。

「さんまがさー……」

「それ、見てたときに、お姉ちゃんがさー、し、死ぬほど笑って、うるさいってお母さんが怒つて」

「笑えるー」

「笑えるー」

担任がその日何か粗相をしようものなら、たいへんな騒ぎになる。

「ざ・ん・げーざ・ん・げー！」

お笑い番組の締めを飾る定番コーナーの一節の大合唱。

番組内で失敗をした人が、キリストを模したキャラクターから懺悔を強いられ許しを乞うが、必ず罰を受けるという内容。

それを真似て、たとえば教師の言い間違いに対して、誰も指示し

なくても一斉に声を揃えて「ざ・ん・げ！」が教室に響き渡り、教師も含めて皆それを面白がっているようだった。

「彩、見たー？」

明るい子が、根暗の彩に声をかける。

「見てない」

「ホント笑えるから、一回見て見てー」

「彩は見ないんだよね、勉強するから」

普通の子たちが寄つて来て、話に割り込む。

「テレビ見ないで勉強するのー？馬鹿ジヤン」

「頭良いからいいんだって」

「私馬鹿だからー頭良い人はすごいねー」

自分の机から動かずじつとしていた彩に最初に声をかけてきた明るい子は、もう別の子のところへしゃべりに行ってしまった。

数人は、まだ根暗の彩の周囲で

「頭良いとたいへんだねー」

「ねー」

「いいよねー、頭良いとお金いっぱいもらえて」

「そうだよね、偉い仕事するんだよね」

口々に言った。

「これからは女の時代だからーってお母さんいつも言つてる

「女でも大学ぐらい出ないとねー」

「彩はいいよねー」

テレビ見ないで勉強しても、べつにかまわないのだ。それはよくわかっている。

でも彩は勉強しているせいでテレビを見ないのでなかつた。

彩が好きな番組を見られるのは、一日にアーメ30分。それも、問答無用で親が優先される。

なぜなら「働いて稼いでいるのは親だから」「彩が生活できるのは親のお陰だから」だ。

どこまで説明すればいいのかわからなかつた。

しゃべり過ぎれば嫌われる。10才ともなれば、そういうことには厳しい。下手すると大人よりも。

なぜか自分が悪いと感じて、恥ずかしくて仕方なかつた。動けなかつた。動くことは許されない。一体何によつて許されないのか？そんなのわからない。

その場に相応しくない愚かで醜い自分が消えてしまえばいいと思つた。

彩が相変わらず何も言わないので飽きたのか、

「何、なんで何もしゃべらないの」

「気取つてる」

「頭良いと思つて」

彩に充分聞こえる声で言いながら、みんなは彩の席から離れた。

・

「チャンネル争いで負けた、って言えば良かつたのよ」

彩は、「コーヒーを飲みながら言つた。

「『お父さんがいばつて』って言えば、大概はそれで納得すると思つ

うんうん、と頷きながら正面に座る彼が答える。

「かわいそー、つてなつたかもね、逆に」

「なつたかなー？わかんないな」

「ほんとに会話力のない人だね。ちょっとは頭使いなよ」

「はいはい」

彩は大げさにため息をついてみせた。

待ち合わせしたいつものファミレス。一人の前にはブラックホールだけ。長居はない。

吸っていたタバコの短さが、時を告げる。

「あ、私選挙行つたのよ。行つた?」

社会問題。まるで自然にそうなっちゃいましたみたいに。いじめもそうだった。いじめが社会にあるのは当たり前、だから学校でその対処法を学ぶのも当たり前。いじめ「問題」があると、その原因にされたのはいじめっ子でも教師の対応でもなく、常にいじめられた方だった。

クラス内でいじめられていることが知れると、先生に呼び出されて説教を食らつたものだ。何でいじめられてるのかわかつて?何で黙つてるの?どうしたらいいと思つ?

自然であるはずがない。すべて人為的なものだ。

「みんなと一緒にいじめなきや、自分がいじめられるから」という理由で、集団無視やいじめに加わっていた方が、「協調性が高い」と評価された。

教室の隅っこで本を読んでいるよりも。

人と人を比較して、意味の奪い合いをして、それを面白がり味わい尽くしたのは誰?

「笑えるー」

彩は言つてみた。

向こう正面では彼が財布の中身を確認しながら、うんうん、と頷いていた。

彩の話をあまり聞く気のなさそうなその顔を見ていると、横っ面を引っ叩いてこっちを向かせたい衝動に駆られたが、ぐっとこらえた。

怒りを抑えるために息を整えて姿勢を正して彼を見ていたら、視線を感じたのか、うつむいていた顔を上げて、彩を見て彼が微笑んだ。

「莫迦……」

心の中で、罵った。了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8161c/>

---

テレビ

2011年1月20日01時40分発行